# 負暄錄

壹

特別
14
1919
106

~~176389~~
176390

○佛教の中道論

佛教の精髄は第一義諦なる真如なるも実相なるも
涅槃なるも畢竟するに中道なり譬へば例へば人間の
中道を取れば其中道なるも、中道なるも仏教や
哲学なるも皆中道なり差別なるも平等即差別
待即絶待、即ち平等即差別即平等相
対即ち平等の行を
以て中道とす

38- 8912

[illegible]社[illegible]即ち平等差別の中道[illegible]法[illegible]
[illegible]而して之を如くの如く[illegible]大乗の宗教即
[illegible]し、自分
役者の一人[illegible]思へば[illegible]平等差別の中道[illegible]
[illegible]厨物役をする平助役者も三
助阿三をする役者も役者を指さを平等権[illegible]も
唯[illegible]差別を[illegible]、上下貴賤の色々の
差別を勤さうさんハ其者の上の差別あれ
之を平等中の差別[illegible]其差別の中に又平等あり
厳格[illegible]厳格と[illegible]三助[illegible]閉じ[illegible]さ
んハ[illegible]格[illegible]厳格[illegible]ことを得さんば厳格を厳格

の後三助を三助の後上下貴賤のごとき平等権[illegible]差
別中の平等[illegible]さんハ平等[illegible]差別あるも片方[illegible]
中道[illegible]
[illegible]我[illegible]
三助も阿三も[illegible]
[illegible]、世間相常住とあるも、諸法住法住、とあるも
[illegible]夫れ[illegible]の法住[illegible]平等権の実相
[illegible]之れ[illegible]世間の[illegible]
[illegible]の地位[illegible]平等[illegible]地位
[illegible]地現[illegible]
[illegible]地[illegible]

味もの[illegible]も社会を法[illegible]行[illegible]を謂[illegible]を此平等[illegible]
下を上を敬[illegible]平等とは之を安[illegible]
の[illegible]を平等[illegible]
[illegible]下の上を敬[illegible]
[illegible]全体を平等[illegible]
[illegible]倫上のこと[illegible]
[illegible]の憐を受[illegible]
又上[illegible]
[illegible]自[illegible]

東京帝国大学図書館

難く加之教[illegible]下民[illegible]上民の[illegible]
[illegible]上民[illegible]
[illegible]千[illegible]
[illegible]佛教[illegible]上民の[illegible]
下民の[illegible]千[illegible]
教[illegible]四民平等倫[illegible]
は[illegible]人[illegible]行[illegible]佛法も平等倫[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
下民[illegible]教[illegible]難[illegible]佛

教を説いて人々に善を生ぜ
果の佛教を目下上民の始めを下民の望を屬せ
らるゝを以て而して佛教を施すを教
又貧窮を救ふ民に施すを佛法僧
の三寶へ施すを云ふ
ことを教へらるゝ等を以て之を
佛教と称し
し又日本の人民の平均したるを外国と競
うと得るべくして是れ法律の力を平均せし
むるなり佛教の是れ
かへし論ず平等の教をめる

下ることを免からしめ當に此の如き上民ハ下民をして
き上り下民ハ上民を推し上け、上下同心して上ることを
ゑざるも下ることを免からしむるなり、要するに西洋の所
謂進化論の手傳を為すと異なるなく[redacted]るを除し
此同体平等を為すことを免かれは甲の上らんとするを見
て乙も妬ましく思ひ乙自ら上らずとも甲を引きさけて
満足せんとし甲も乙を蹴下して上らんとして唯甲
乙の争のみあらん甲乙共に下るとも上ることを免かれ此
例へを示すなるものなり依て平等主義なるときは甲乙とも
上ることあるも下ることを免かれ甲乙互に助け合ひて都
腐心せざるべからざるなり引き上け合ふ様ならしめ

其實の様に一般多数の波瀾を為すことあらしむる事
竟の優勝劣敗に知らしめずして総体の進化を
計らしむるなり即ち佛教を聖道門の布施、持
戒、忍辱、精進、禅定、智慧の六度の行にたとへ
浄土門の其他二論によりて此助け合を進化せ
しむる教なりと教ふべきなり、されば因果応報
論は進化主義なり、同体平等論は其進化を
助けて一層速ならしむる方法なり総体を進化せしめ一部
の進化なりとも総体の進化あらざるべからず一部の進化
は退歩して総体の進化を益するを覚らしむる主義なり
と謂ふべし

この一節寺田福寿先生「義を授受」相待絶待を
金方丈絶待善海と称する一毒中毒を抑止す
春堂猶侵身四生と載せる二節と係り看
るべし

○釋迦以前印度の宗教及び

東京博文館印刷

印度を歴史的観念の国なりとなす所以
上四恵の大なる発達にして事実(一)釈迦以前の所説に於ける所而
して(二)又印度四恵の特色
として歴史的に解脱涅槃を求むる思恵の切なる
事は明白なる事実なれども然れども宗教的
観念を世界文化の母なりとなす世界哲学の先駆なりとして
又世界宗教の源なる四吠陀千年の
前なる古代なる釈迦牟尼以前の宗教起源を論ずる
資料なりとなす但し信仰を宇宙に於て人為問題、死生
問題、輪廻問題、涅槃問題の如き所謂形而上の諸問題
の疑々攻究せらるるあるを思恵界哲学の要
素的に止まらず国俗を失うするに至る

東洋文庫

[illegible]印度の[illegible]を[illegible]として[illegible]而上の思惟
の所のものを[illegible]と云ふを一の派[illegible]として
攻究する者あるべきなり、蓋し世尊の化[illegible]風は西り
[illegible]くまでもなく[illegible]
其の[illegible]の出世[illegible]数千年の間のあるべし
[illegible]の思惟[illegible]の印度の思惟の
特色として[illegible]厭世的の解脱涅槃
を中心とする思惟[illegible]を以て[illegible]優婆尼
沙土、尼夜耶、衛世、僧佉の[illegible]
涅槃考[illegible]、[illegible]宗教を以て[illegible]梵天自

在天、韋陀論を云ふ[illegible]厭世的涅槃の考
[illegible]所謂九十五種の外道[illegible]
[illegible]厭生的涅槃の考へ由て成立せ
[illegible]故に「楞伽経」[illegible]十種の涅槃論
を列挙し、「楞伽経」宋譯[illegible]二十二種の涅槃論
を列挙し「外道小乗涅槃論」[illegible]二十二種の涅槃
論を列挙、何れも皆外道涅槃論の分類[illegible]さ
[illegible]古代印度の思惟の潮流[illegible]知るべし
要するに[illegible]
を振るし婆羅門の一族ぞ其流義[illegible]少の異
同あるも皆涅槃[illegible]厭世的涅槃観を重きを置く

さまざまの宗教を摂収して成
世界思想の潮流を汎々乎として来るこの
を生じ終る所なき思想界の特色を鑄出
するに至りしこの
動の如く世界萬国を支配して政治上の思想疾く衰亡
し而も廃仏毀釈の運動を惹きしは所謂四大代の状況を
きたらしめし釋迦も時勢の産物にして此潮流中に出現
せしに過ぎず人生一般の観念を変化せしめ厭世の風
潮を廃仏毀釈観の変遷を経ることを免れず
に東印度思想の潮流を汎神的大別二流に
岩達せしこの一を有神的教義と称し他の

一を無神的教義と謂へり印度の波羅門教各派
の中に就て梵天、自在天、韋陀天、伊賜論、摩陀羅論
と称するものは人格的造物主の存在を認め
之を主宰として宇宙間万物を人格的創造物及び又人
身間万物を浮屠間万物及び世界を試みとなし
これは凡べて有神論と云いまた此思想論の中
又数種の分あるも人格的天帝を以て
主義の根底となすことは同一軌なるを之を概し
て有神的思想の系統なりとす、又地論外論
風論方論時論本際論僧法論、衛世論のもき総
べて人格的造物主の外に主義の根底を求め之を

東京帝国大学図書館

七宗論問題、人身問題、涅槃問題の如き種々の論の
解釋を試みたるものを成実論と云ふことを得
成実論の中に又数千種の論あることを知る人格
的道徳を説くことを得たりしも後に三論の根據を求めし
ことを同一軌道なりとなすが故に余之を採らんとする所以
也の如く二派あると雖、成実論涅槃観を成仏の目的
なることを双方一致なるも但し根本的主義の基礎を
異にするものなるが故に涅槃観の如きも所説を異
にすべし夫れ成実論は涅槃を説かず来世天神の處に生れる快
楽を説くに涅槃を説かざるべし夫れ仏

教の本旨とするものは涅槃にあるべし小乘涅槃論
なるべし
而して釋迦牟尼仏は自ら獨得するところ
にして仏教を開始するに至りて無畏の説
羅門教は婆羅門教なるが故に無畏の説
羅門教を仏教と歴史的関係あるものとして抑
何の教なるや曰く婆羅門教は婆羅門教
なるに反して仏教の関係なるものなり
なるとして仏教と歴史的関係あるものなる
あるものとして仏教の関係なるものなる
あるものとして仏教の関係なるものなる
あるものとして仏教の関係なるものなる

或するものもあるべし。其前者を尊しとし他力正反対の方針をもつて其起せしものを佛教とし、後者を佛教とし、初からも之を排し之を義とせんとする者の如きは正に主義の相違を人格の天分に求めずして理想の淨穢等を求め以て自宗獨淨の宗教を立者とせし人なりとす。而二流の中にも亦の系統を徒き多くは一系の改進を無く每の支彩を浮くしたるものと云ふべきなり。（村上専精佛教大綱論）

○「さび」の說

拾遺軒「さび」おろしを人名とし、誰人の發うゆゑ考ひと料理法にあるべし。金澤家にて云ふ所ナトロエンとカリインの消化に適する料理なり。衛生上より云ふべきに、よく消化を助くる料理の二風を云ふ。其中にて、特に消化を助くる料理のみを大根おろしと云ふ。特に消化を助くる料理の具にて、殿のごとき不消化物をよく消化せしむるおろしの如きものを用ひたるなり。牧角氏はおろしを「消化を助けるためにおろす」と説明せり。拾遺軒「さび」を説くあるものは必要なる塩物のみを必要とし、消化のみを主とするものなり。

[illegible]を指ゆるおろし[illegible]は[illegible]びう塩くしるるきま
つて[illegible]ゆ[illegible]「[illegible]み」と[illegible]を指
ゆ[illegible]ことなつて[illegible]「[illegible]み」う塩物上鉄
くのつくることゞ[illegible]、れゆの[illegible]を「[illegible]」し
を用ゆ[illegible]ソウで家[illegible]分[illegible][illegible][illegible]一国つと云
小田て[illegible]し[illegible]事の[illegible]、金[illegible]病の[illegible]医[illegible]
[illegible]「[illegible]」を[illegible]せんれ、[illegible]永い[illegible]病[illegible][illegible]実て国つ
れ、[illegible]つて[illegible]ようさそう[illegible]ゆ[illegible]
[illegible]を鉄いて[illegible]を指ゆ[illegible]の味ゞよ[illegible]
[illegible]、
「[illegible]」ゆいろ〳〵[illegible]味の[illegible]「[illegible]」を

才一の推さいるを得[illegible]、あし[illegible]酒客[illegible]北[illegible]鉄く
可[illegible]、[illegible]「[illegible]み」[illegible]「[illegible]」と
して鉄く[illegible]、[illegible]あ[illegible]
つて[illegible]酒[illegible]を[illegible]ゆ[illegible]是を[illegible]ことゆ[illegible]
[illegible]る[illegible]、金[illegible]熱[illegible]る[illegible]寺の[illegible]
して[illegible]人で酒を[illegible]
る[illegible]けつて[illegible]
る[illegible]物の[illegible]
[illegible]の一本「[illegible]」の[illegible]
[illegible]こんを[illegible]
ておくのゆと[illegible]

[illegible]の味のあるひとうたいとして、夢もさうしたい味いうあつて、[illegible]ひあるうさびを[illegible]野菜[illegible]の[illegible]、風流人[illegible]おきの[illegible]、[illegible]、芹の[illegible]の泥中に生長[illegible]丸ひ及[illegible]の汚穢の[illegible]生じ[illegible]、[illegible]「さび」を[illegible]人がいくら[illegible]行つて見ても、[illegible]の[illegible]の風情を一見の[illegible]

東京 博文堂製

全体[illegible]流れの中に生長[illegible]の[illegible]「さび」の[illegible]流れ[illegible]さうさんの[illegible]作つてゐるのだ、則ちあの[illegible]相[illegible]多少の角[illegible]傾斜[illegible]流の[illegible]一刻[illegible]流れ出[illegible]中[illegible]砂利と[illegible]根[illegible]流出の実[illegible]の[illegible]国面を洗ひて層一層と通下する[illegible]

投師の決えてなくなる所の俳諧師の土ふ
どう附蕉をも忽ち廣き流行ひある、実にりかし
る心潔癖のある清浮なるものを嫌ひ、風流
人のたゝずまひなどの、こゝろさびを尊しと
雷雨を嫌うある、それを何のとあるを指り先
生解説氏ひある、此如何んの生れ変りうたるべい
が、「さび」の人の眼を偷んひまを隙を
つくとは十事一日である、指行先を「さび」の味が
てゝうとゝもゝ奇と云ハさるを得ない、文人の意
せゝるゝ以ひゝるゝうゝ文人と自ら放味を同じ
うゝてゝるものの、何人をゝ思ふ雷雨ない敵ひを

東京帝國大學圖書館

ゝつゝ
一歩歩「さび」を以つて世く如獲うまんばこう
用を候ちとゝ、こんゝゝ「さび」の歩さも
ちゝぶしい、ゝのまゝもゝゝ「さび」とゝ強和
の一種のうゝみを出すのゝ酸酸化用のよ
のひゝ、即ちこんをおゝゝ酸酸ゝゝで
おゝしゝゝが涼しゝ分ゝ意ゝゝ酸酸ゝゝ
食ゝうゝみも金ゝかゝるのひある
ゝのゝゝゝしゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝの様をゝる

## ○大悟底ー涅槃の異名

村上專精推理の独断にして曰く仏教等主の根底を釈迦の大悟界是なりと云ハさるを得ず而して西洋人これを名づけて涅槃界とし果して如何なる性質を有するや其の人也抱く所の大悟界と果して如何なる性質を有するや唯だ茫然何ぞん之を聴えと雖も終に解する能はず何んぞ況んや既に大悟と云ふ其性質極めて微妙なるも終に論ずべからざるものなり唯だ直覚と涅槃きものなるのみ而して此の涅槃を求めんとする者は如何ぞ

東京大学図書

形容の言葉なり涅槃を消滅したるものなり

大悟界を此の如く解釈するも涅槃なるものは何ものか其の性質を知ること能はず強て之を説かんとするも之を表するに足る適当の文字なきを如何せん

涅槃の名流七処徳の名称として起りしものなり

其小乗仏教とするも中に於ても此の解釈を容るる謹しむべし四諦論者は涅槃別名有六十六勾其義を問て其答へしるべきなり長流、真諦、彼岸、拙細、雖凡とするものなり六十六種の異名を陳列して之を略解す

是等の小乗家の仏教に於て涅槃の凡解を行ふ異

論をなせし微細なること驚くべし
又大乗仏教のあらゆる「義林章」一書に集めて
三十一種の異名を列挙、法華玄義八下にも実教
を十二種の異名を列挙するのみならず釋迦の大悟界不
涅槃を説かんとして為に異名をもって之を志
すべきなり

唯識　中道　般若　一乗　一実諦
一依　空性　如来蔵　仏性　自性清浄心
法界　不二法門　一生不滅　不思議　非有非無
因成実　真如　法界　法性　不空如来蔵性
真際　不変異性　平等性　離生性　法定

法住　法住　不思議界　虚空界　我
勝義（已上三十一名義林章出）
如有　真善　妙色　実際　畢竟空
如々　涅槃　虚空　仏性　如来蔵
寂滅　中実理　中道　非有非無　第一義諦
微妙（已上十二名法華玄義出）

斯の如く種々の異名を生ずるは仏教研究者の視線
う此涅槃問題に輝集し来る種々の異論を為
生ずる結果の現象なるべし
更に之を支那日本の仏教中古に流るるに生ずる
しかるに之を論ずる法華玄義なるべし唯識と云ひ

三論宗なりと云ひ八不と云ひ摂論宗なりと云ひ菴摩羅識と云ひ
天台宗なりと云ひ他論宗なりと云ひ阿梨耶識と云ひ
ひ華厳宗なりと云ひ三諦円融と云ひ或は性具と云
と云ひ真言宗なりと云ひ磨と云ひ或は性起
磨或は大日如来と云ひ禅宗なりと云ひ阿含本不生或は六大
或は涅槃妙心と云ひ或は日蓮宗なり正法眼蔵
と云ひ十曼荼羅と云ひ浄土教なりと云ひ極楽
往生あり或は浄土或は阿弥陀
如来と云ふものは是し釈迦大悦尼の涅槃経
なる為なる迦葉の開顕なりん

○佛陀の説んとする正味なり

佛教の経典は七十餘年の長きを上ること中
に就て是れ全く佛陀の脳髄なる中
に謂へる如き點は果して何なる者か、是れ宗教の
信仰を要とする文も此の阿含なり
今日に於ても高僧を以て信仰せらるる四雅しき
説の主なる宗教の無義の論なりとの為
を懐ける人なりとあるを須菩提の佛の何
なる出る為なりとなる説なりと云

へて智度論中にもくわしく外書を引て須彌、純一金色
佛法所説、四寶所成と山色を説くは純金色と四寶
との異なるべし外道論中にも須彌説あるべきなり
べきなり但し倶舍世界の著者なる法憧は
三藏中、論天文、世儒皆疑其不經、釋氏亦病焉、
蓋三藏所載、一從古来相傳之説耳
と断じ、長泉院の普敬も倶舍論要解世間品
の下に於て
天竺之源出於胡梵、或是曜四雲氏所造、或是
曆歷仙人所説等、集本皆五通仙人所出、佛出
世前、已有此道、

東洋文庫

と云て、さんは須彌の有る事、寶の如くに描きを
の説の佛の創出に非ざること弘人と雷同するさ
ゝ
然るに生死輪廻は是こそ佛教の真髓なれ
ものなれ、手生死輪廻は六外道に於ても之を説けど
是とて以て佛教の特点とはあるべからざるなり然ら
ば極微所成、四大和合は是こそ佛教の特点なりと云ハ
んや極微所成、四大和合も亦外道既に之を説く也
つ四大のなきを倶舍等も之を説く也、法さんも咸寶論
ゝ之を説く也、咸寶の四大を佛法と
ゝを数論外道の説を採用しなるを著し、その数

論の説を採用せし成実論も、倶舎論と同く佛教なれ
ども次上に四大説ぶ佛教の真実体を説くに関係なきが
ごとくなれども、然は末那生滅
是れ正に極深細の説なれば佛教の特に立つる所なり
いんう、刹那生滅も或る部分の外道に之を説く
第七外道論中の説なれば是を以て佛教の特点
とす眼目なれども未だ説かず、然成
法報応の三身是を体に於て未だ説かざる
もしくは云々、法報応の三身説も外道論中に其之
を提婆菩薩の外道十乗深義論と同く
摩醯首羅、一体三分、所謂梵天、那羅延、摩

醯首羅
と云論嘉祥の疏上の中に自在天の三身を説く唯識
論演秘一の末に傳釋して曰く
彼宗説自在、有三身別、謂法報化、彼説報身、居
色天上、不来下生、説似世尊、受用身也、其変化身、
随形六道、教化衆生、乃至法身即此論所叙是
也
と雖も六識の外に阿那含阿(三)頼那等の深細の識を説
くは之れも外道論中に説きたる所なれども、阿
頼耶も亦外道中に在りて大日経住心品に説く三
十邪計の一に依て高次仲基の出定後説に案

阿頼耶識、本外道所説、大日経所載三十種妄計、可見、
仏家特因以説之已とぞ
前来の如く論じ来たる七千住生の大乗中、皆ここに
仏の肺腑を出て仏教の骨髄と云つべきもの
なり、宇宙を貫通し、万法を統べ、仏教の花
実、所謂諸行無常、諸法無我、涅槃寂静の
三行法印と、仏教の印信と定めて、之を三法印と称
し、又八一実相印を実相の理を説くものとを
以て仏教の説を甄別する印信とせり、法華玄
義四八上ノ二

釋論云、諸大乗経、若有無常無我涅槃三印、印

之即即是佛説、修之得道、無三法印、即是魔
説大乗経、但有一法印、謂諸法実相、名了義経、
能得大道、若無実相印、是魔所説、故身子云、
世尊説実道、波旬無此事、
と云へり、何故ぞ此の如く大乗経に三法印、大乗経
に一法印ありと云へる法華玄義なれの文を続いて
此の疑問を解釈して
何故、十三大一、小乗明生死与涅槃、生死以無常為初
印、無我為後印、二印印説生死、涅槃但用一寂滅
印、是故須三、大乗生死即涅槃、涅槃即生死、
不二不異、浄名曰、一切衆生、常寂滅相、即大涅

槃、又云本自不生、今則無滅、本不生者、則非無常
無我相、今則無滅者、則非不寂滅相、唯是一實相、
實相故言常寂滅相、即大涅槃、但用一印也、
云云、然は仏教の真髄骨子なる法法実相
云云、現想論に於ては人乎然は
此の言葉を言ふる法の本比喩なる仏教なりと板断
す、一つ云云、何と云云、実相の作を或る言義
に於て亦破法印の用ひ方潟へきものなんぞ云云
云云、言義の実相倫の仏教の骨子なる
宇宙なる言義を以て実相を云ふ強を解釈し
ためを仏教を言はず宇宙を言ふ仏教の

東京樣原製

研究をなすべ
今之を要して仏教の骨子なる真諦
即仏教の特色を消極的之を云ふ仏教の二大
を或を或を和と云ふ中の也、詩云る一言以蔽之、
曰思無邪、大意七千、一言以蔽之、曰破妄執と謂
ふ、し義し夫れ積極的之を云ふ中道の二字なる内
す、夫子曰道一以貫之、曰忠恕而已、迦文之道、一以貫之
曰中道、と謂ふべき歟、此の破執と云ひ中道と云
ふを即ち前述の実相の実相の概説の実相と云ふ
の言義を表へ云ふ名目の上を題いさんとの為に仮
を用ひたるなるべし（以上前田慧雲「仏教概論」）

中ちなの出す）

村上専精氏「仏教大綱論中「釋迦」の教義」を論ず

一、以上と同一の問題を攻究せんとするの

仏教の根底論を決定せんとするに困難の事多き

共困難とする所は現在の仏教が只洪流の

るるとなれば中に反動の衝突を生ずるの

反動の衝突をなすべき仏教に向ひて同一の根底

をなすことを要する困難なる事なりと云はざるを

ず、二、仏教史のめぐり傳大乗は又衝突を生ずるもの

なり来たる仏教をいふべきなり微塵なりと云はざるを

ずすなわち仏教なる以来仏教なるべし果して

仏教中の非仏教のものあるとせんか先づ其仏教

非仏教を判定せざるべからず釋迦の三脚なる根

底を知ることを能はざるべからず、しかる仏教非仏教の判

定容易なるべしかるに根底を一言にして容易

なるべしかるに今を以て之を考ふるに十二縁起、四諦、

三法印のごとき拙劣なる根底を以て

釋迦説教の範疇なるべきことを信ずべし彼

八万聖典の開祖なる釋迦の出つることを弘

人とするべしかるに阿含経のごとき小乗部は非仏教なる

なる又阿含経のごとき小乗部は永久に傳せしものと

後漸く記録せしものなるべし悪く仏教なる代に

雖しと云へども十二縁起、四諦、三法印のごとき八聖道の格言を傳へしこゝろを謂へるなり、於之此四諦三法印及び十二縁起を説きたまへば必ずや佛あり此中の抑揚せんさるあることなり佛説滞説う去り未決の問題なり大乘佛教も決して此を関係するこゝろもちゐず彼も此絶の妙道なり故に此を説きたまふ各佛教一として共宗教の提唱せんさるものあることなり由て之を佛教の三宗教と称し之を以て佛教の根拠を決せんとす三宗教の大要左のごとし

十二縁起の大意を穆述自ら生死問題と涅槃問題を解釈し迷悟両界の進退を決断せし意味の論式を十二段の書きしこゝろを共表面を表人が生死輪廻すべき所以を開説するあるも亦此面の特徴を根本的知識の一元を除印するあるも亦其の一元を除印する目的は一方は生死輪廻の関係を断ち他の一方は涅槃する大真理を卿悟するにあるとかく十二縁起の大意を説明するに涅槃を大悟すること云ふなり

苦集滅道の四諦を十二縁起を一面垂しくは生死の方面を涅槃の方面と両方の因果律を明示する方式なり十二縁起を生死の方面はましき

も涅槃の方面に於て四諦を生死の方面に属すべき因果律を概して苦集二諦と云ひ涅槃の方面に属すべき因果律を概して滅道二諦と云へり、是れ其説の間に似て却て複雑なる如のみ、乎縁起因果律を以て説明あり生死の苦を一日も集の感業に由る故に苦を厭ふ者は集を断つことを要すべし集を断ずれば苦を滅す、苦を滅すれば集を断じて苦を滅せしところを消極的の説にて滅諦と云ふ是即涅槃なり、此滅を以て目的とする道徳戒定を実行せしめんとする道徳説なり

東京博文堂

ことを得ると一方には生死の苦を滅し他の方には涅槃の楽を得べき方法を教へたる故に四諦の大意は生死を有きを涅槃なりと知ることを得るなり

已上四諦十二因縁を以て主観的人身論とすれば三法印は客観的宇宙論と謂ふべきものにして又四諦十二縁起を時間的因果論とすれば三法印は空間的本體論と謂ふべきものなり

縁起説は物質論にも精神論にも通ずるものなり

三法印は宇宙の現象界を一切皆苦なりとし諸行無常なりとし諸法無我なりとして生滅変換せざるものなしと断定せし金言

諸法を我と現象界の外に於て
之を一言にして涅槃寂滅と
断定せし金言なり涅槃寂滅とは元
来現象と本体を分割する時に考へたる我を
現象の方面に属し、寂滅、本体の方面に属せる
を得ず、即ち吾人の見る諸法現象界の
の外に於て吾人の考へたる我が
絶滅する能はざる本体界を考へ又我が
之を超絶的円満完全界なるべく
求めべきものと云へる言を含む、彼の三法印は前の
四諦十二縁起と衛応する事疑を挟む

東京 株原製

彼の言を後代に云へる言を含む諸法無我、涅槃寂滅
の大分なりと問へば其とも吾人の求めるべきものは
涅槃是なりと云へる所なるべし
此の如く三綱領孰れも皆諸の涅槃なる
三綱領なりと涅槃を内証する
証せざるべからざる事なり仏教凡て涅槃
を目的とする仏教なる仏教の中心なる
も心涅槃なりと謂ひ得ず

## 備考

○刹那主義と一期主義
吾人の生れて死するまで
刹那刹那と一期一期と
刹那刹那と一期一期と

のちを事の理を一時の間も止むことなく有る念
あれこれを為す念あれこれを為す念あれこ
れを為す又為す念あれこれを為す刹那
とて極く僅かの時の中にも変化の多いこ
とを言うのである刹那とは極くあしの時の
事である　華厳経　大乗仏教方法

(三)四大仮和合　仏教で四大の仮和合というのは今の
学問でいう元素と元素との化合によって出来た
ものを四つに分けて身体の堅さを土、湿ひの
あるところは水、暖いのを火、動くのを風とする
のである堅(地)湿(水)暖(火)動(風)の四つと

ます要するに人体を構成する元素の仮和
合のようで出来たのだとこれを言うのである即ち地
身体を四大の仮和合で構成する我というものは
だん因縁の和合するに従って生ずるものであって身体を現して
来るのである　合上

(三)阿頼耶識　阿頼耶とは梵語で又那と訳して
無没というのである無没とは決して滅しない
世の中にある一切万物の本を為す種子
そこの心の中に義まってそこに義
識とは言葉、義とは文字ナリス、オサメル等の義

で我等の経験を此中に収蔵して流転するをいふのでこんどは心の本体直ちに宇宙萬有の本体となるのです。此の宇宙萬有の本体であります所の我れの根本をなすものは起らぬ絶対なるものでありますが、然るにこれが前五識（眼耳鼻舌身の識）や第六意識の衝動によりて不断の働をする識より起る。これを末那識又は我見識といひます。此識によりて貪瞋痴の煩悩は絶ゆるのです。即ち阿頼耶識を湛へたる水の如きものでありますが、これが前五識や意識の風に吹かれて、この末那識の波が起るのですから、末那識とは外にあるのではない。不生不滅の阿頼耶の中に転変せられてをるのであります。前五識や意識の衝動させられば明皎々たるものなるが、此衝動によりて煩悩が起るのであります。五蘊皆空を観じて所対の境に執着をなさせぬやうにすれば貪瞋痴の三毒を起さぬのです。然るに見境の執着することがあれば三れの境でこれに執着すれば、それの迷ひ来りて係し迷の境のことく異つたところのものまゝ心一つの用ひやうによりて悟も迷となり迷も悟となるのです

上仝

(四)十二縁起　生老病死を何の中に起るかを釋迦之を

解と曰く生老病死苦の現象は業いはゆる、其の業八或は煩悩に由る、凡そ苦人八或は煩悩に由て無明なり、無明に由て又或は苦を生し、業を作る、苦を去るに、之に由て輪廻せざるを得ず、即ち生老病死の苦なり、之を去るとは煩悩を解脱し、之を因果律と名づけ、此を解脱し、之を或は苦集滅道の三諦といふ、此を或は苦集滅の三諦の循環の因果を五蘊に分析説明したるものを十二縁起、或は二因縁と云ふ、佛陀成道の時の言十二縁起の生死問題解脱の論旨を示すものを以て佛陀十二縁起の一文を抄出すべし

過去現在因果往因、爾時菩薩、至第三夜、観衆生性次何因縁、而有老死、即知老死、以生為本、若離生則無老死、又復此生不従天生、不従自生、非無縁生、従因縁生、因於欲有色有無色有業生、又観三有業、従何而生、即知三有業、従四取生、又観四取従何生、即知四取、従愛而生、又復観愛従何而生、即便知受従愛生、又復観受従何生、即便知受従觸而生、又復観觸従何而生、即便知觸従六入生、又復六入従何而生、即知六入従名色生、又復観名色従何而生、即知名色従識而

生、又復観察後何而生、即便知識後行而生、又復
観行後何而生、即便知行後無明生、
是即ち得道の言葉を生ずる問答解答あるし論ずる
を十二段の分として説くものを其大意を一言する
る者人の解すべき死苦死を以て整問の端緒とする
十二段を推論して元始を出だし
以て生死苦の由て起る根本の原因を
尋ねんとするの為なり
と断定するのあるも迷の根源果して何一なる
るやとする処を以て識元の言を即ち悟の涅
槃とする説あるのみ 佛教大意論

○十二因縁流轉之圖

○過去の二因 無明 行
○現在の五果 識 名色 六入 觸 受
○現在の三因 愛 取 有
○未来の二果 生 老死

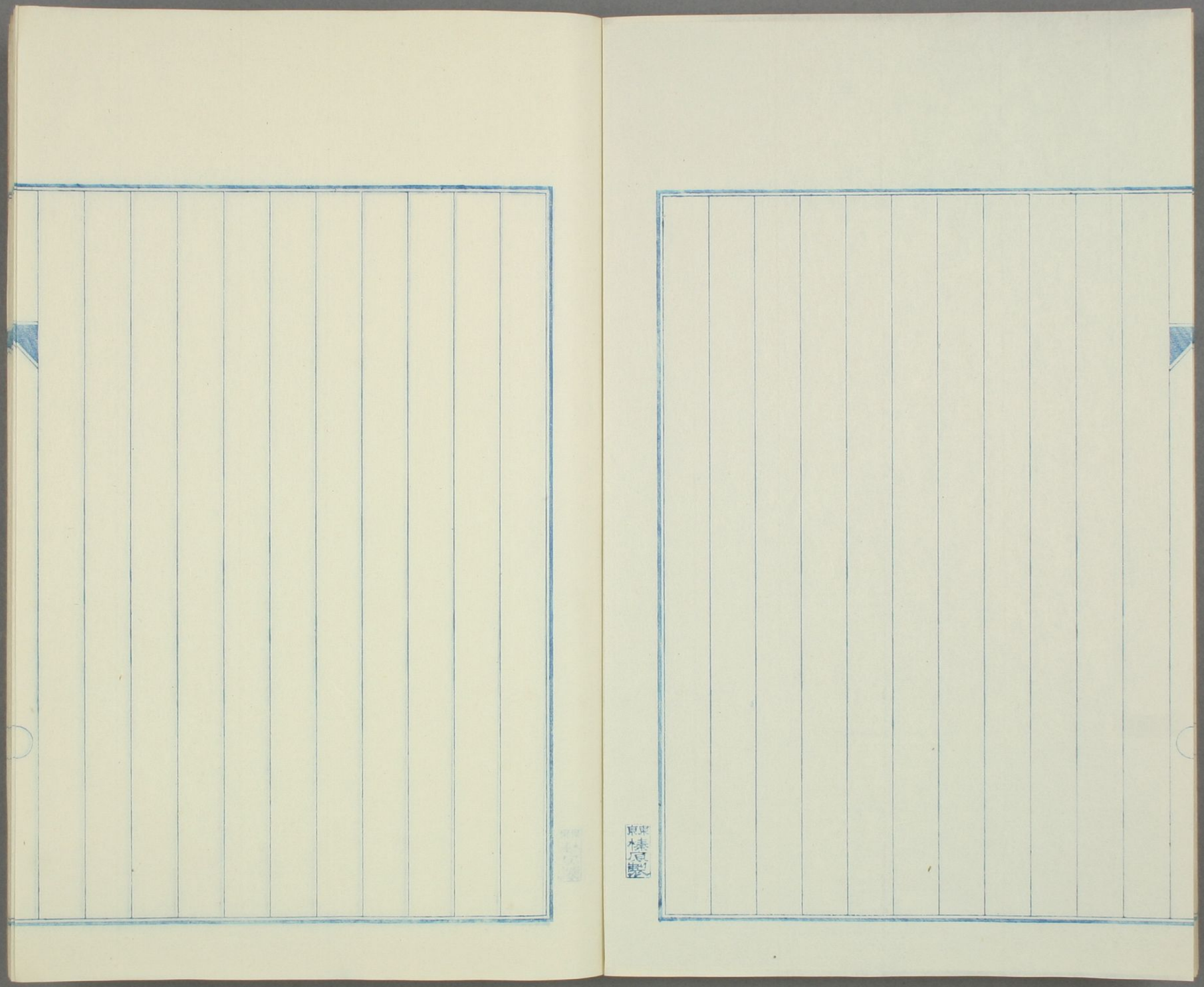
○過去の二因 ○此を生有の五蘊と云ふも現在の物
阿賴耶識
○此を三識和合して母胎の在る間胞衣の住
して煖金水
○母胎に在て六根具足しなるまでの時
○出産後三四年を経るまでの時
○五六年を経て少年後十三年迄の時
○十四五年を経て十八歳迄の時
性慾盛に断く様なる時
○二十歳以後性慾充実する時
○愛欲は未来の為に行なる有は未来
の為に業となる愛取と煩悩有は業

○未来の二果

生　○花ハ生有の立場行りて生有るを未来の生有
　　の種子葉生成の源なり

老死　○花の成熟色変入顧変変変えるのみ
　　未来の果の果果の果々を変ることなり

東京 佛教館製



東京都立中央図書館蔵

○支那と印度の話

支那人は昔から印度を仏教の発祥地と考へて分の聖地と崇敬するのみならず、全然之を奉つて或る点迄は支那人を人の天子と同様に思ひ、之を人の天子を人の天子たらしめんとする為の聖地と考へて、人の天子たる者の聖地を得る為めの必要の地と考へて、之の崇敬の念は実に大なるものがあるが、支那は昔印度を指して天竺と称し、仏教を伝へる人を天竺僧と称し、一つも仏教の不敬とは考へなかつたらしい

と云つて印度は支那を敬ひ、仏教を支那に伝へる為の媒介者と考へて、行幸を迎へ奉り、疫神を追ふ大石塔を造つて、之を疫神の主と云ふ事迄、又印度の人の天子たる者の聖地を得る為の必要の地と考へたらしいのである

東京博文堂製

○日露風雨葉

伊藤の二度目の渡韓と宮廷の清地を政略の指と
なし先づ先帝陛下に説向あり時の内閣を
元老を本国に召還し宮内省の官制を改正し
伊藤侯の意を体して内閣の顔ぶれを
その意のままなることの為やとの論和至り
へきるあるとせんも我朝史上例なつけ
を僧位のことを聖を言んず五家
及人の地位を例しなるの間あるを聖
澄ぶるしとなる
けさせん、個枝を清水
陛下を清上貴を仏
神況を

元帝の前に陛下を清不敬なる
もし除を上奏を伊藤の行状を
の過言を言ふの不敬を宮廷を
皮を鉄きを清具まを見するを
の考を之れをこの事なるく

○古書の年紀

二百年前の古書に金箔
をおきあるをよく
七年泥を塗ることを山の
古画絵巻の考を

○山人氏の列仙全傳

近頃の著述中、山人程多く世に傳へられ、年一年多く出でて、お仕業もしが四方四方の流しの中、金を戴んで氏の名高い書きたるの骨董屏を見せて、珍奇の意、常に多くの骨董の中を乱し、文物も書きを何の役に立たぬ、ひたすら氏曰く列仙全傳こそ金の為に中の逸品なりと信じ、自ら誤らずとをゆけば必ず信ずる事間のみ出版中なる数を知らざるべき、この校訂の四つ、いで、その校訂を考へ記し後の遺忘を待ちん

列仙全傳四書を勝田竹翁の手を経て本校彩色校訂凡そ千八十段校訂竹翁の名画を少年家の伝授を名画をもし人のもとに画工をもし人のもとに画工をもし人多くさんも一種を美しく校すべきの名手をこの四つを少年家の金を新に言をもしの也如之の副山の傳を同じく絹書を林すを家うの著作家を完全しこの、迂を点迂を自分の手にもとを珍らし傳の校訂千四百五段あるとは画を体して彼是二千四百五段校もとも及ぶ大部のもの

全部拾八帖ニ装潢し壱帖の厚サ一尺位
もあるべし三帖ツヽ一函ニ入れ都合六函其の重
量ハ一頭の馬背ニ負はしむるにふさはしき位なり
と
此書函の縁起を案ずるに元と紅葉山文庫
の藏本なりしに故ありて上野東叡山ニ移轉
書保存中維新の戦亂起り上野も兵燹
の節拾個のもの過半兵火の手ニ帰し残れ
六個の内三個ハ路傍の手ニ帰せしか三個ハ
幸ニ免れたりしや明治ニ兵燹ニ罹りし
是亦其ことを無事ニ寄贈せられたることも有之

お返しきしに當今臨長式人の手ニ帰セしか
ふたたび出セしと伝へられし三個長持中
の列仙全傳は明治十三年頃ある店より出で
更ニ山内家ニ帰する所となりし
山内氏ハ之れを購入とするや同書二帖を携
へて古筆了任ニ鑑定を乞ひしニ
古筆ハ之を一覧の後紅葉山文庫中のものなりと
と明言し之れを證するニ山里日記を以て
せり山里日記ハ紅葉山文庫の藏書
爆書の節幕府ハ古筆家を召して鑑定
せしめ其の状況を記入せしめ年々の御

本了院さま七年の御ものまる三寸ばかりの墨書
なるあるこ寸本の写しとおぼしきものなれども
後ろに北書面の文字中のものなることを書
きそえるものあるよし
あるいは北の書面を薩州の或る人の写取
しの墨字にて如何を経るとして
貴文をめさいるるとき貴元亘ここの恐
ひを生じるくの書面を中間の人に渡す
書面をもの意を陽に見せしとなる貴入亘
ならこれ後元亘の所行を記しることと
もあるし後元亘の数年のあるを拙筆

東京帝國大學

まんば巨大の差を為さるべきを尽元亘
のおきこと、ならとなる為終に疲入とな
なるべし

## ○紫薇

紫薇も野趣ある食物で風流の野菜と云ふべきよろしい。上方へ行くと京都でも大阪でも知らないでこれを料理するのが案外ない。上方の紫薇はまた味が宜ろしい。どこでも採ることを思ひをつけぬが、この辺ろ出羽あたりは紙に包んであると云ふ事だ。最後の小出しを運んでくると流の谷と見えたるのある。その若きえんだのは、一年の収穫が十箇月もあると云ふ酒は値をこまかい事を云ふまいを得ぬので、そこで紫薇もいろいろ薪がある。出かけのを採るで灰をもって濡し焚火の上へ吊しを

乾すのが上等の品である。それを一本づつ選ってこれを寄親に揃へて乾す。上方ではつくつくのが即ちそれで其の色の青くてめづらしいのも寄親であるから灰で濡さないのであると云ふ事だ。さて紫薇も蕨も雪の多く降つた年ほどよいと云ふ事である。それは何故かと云ふに紫薇も蕨も雪の下に芽が出て育の気を延して居るけれども雪の庭せられて生長せずにをるのであるが雪が消えると同時に一度に[illegible]生ひ出るのである。[illegible]云んで降雪の多き年に[illegible]雪の消えの個所々を取りに行くことで、下部に至るまでの刀を刈る

ことぶき出来る御方なれば雪のあらいとまもなく満山一望
見渡すもいろ〳〵刈り取るいろ〳〵中々趣しるき
ひのえ寅とうまの年の春の事なれば

東京博文館製

東京
榛原製

東京大学図書

閲覧室

明治三十五年
二月念四
春城學人